

豊かな土壌に咲く 活発な活動

ユニークな「世界の絵本読み語り」

『「ある日の夜、ノミが犬の耳をかみました…」』。市国際交流員で米国出身のクリストン・レインさんが自国の絵本を英語で読み聞かせる。同じ交流員でブラジル出身の早籐・クリスチアナ・恵さんが、今度は日本語で子供たちに優しく語りかけた。』——これは帯広市の50回目の「世界の絵本の読み語り」風景を伝えた2004年（平成16年）5月の北海道新聞の記事の一部である。

このユニークな試みは2000年4月、同市のインドネシア出身の国際交流員らが、子供たちの国際理解と外国人との身近な交流を目指して始めたもの。

毎月1回小学校低学年以下の子供とその保護者を対象に開催し、毎回30人前後が参加。在住外国人、留学生、国際協力機構（JICA）の研修員らが、それぞれ交代で“語り部”になり、自国の絵本を子供たちに読み聞かせる。

来日するJICAの研修員に絵本の持参を依頼するなど絵本集めには結構苦労するが、早籐・クリスチアナ・恵さん（05年3月にブラジルに帰国）は「絵本にはその国の民族性、考



「欧米以外の国の人々との交流も大切」と語るブラジル出身のクリスチアナさん（左）とタイのスバワディさん（右）の二人の国際交流員＝2004年10月

え方などが詰まっている。しかも、欧米諸国だけでなく、アジア、アフリカの国々を理解する上で大きな意味がある」という。

今までマレーシア、スリランカ、パキスタン、ノルウェーなど、普段滅多に目に触れるチャンスのない40カ国もの絵本



親子が楽しみにしている「世界の絵本の読み語り」＝2004年

が紹介されたが、それらの絵本は「森の交流館・十勝」内の図書資料室に保管され、いつでも親子で楽しめる「世界の絵本コーナー」のスペースも設けられている。次代を担う子供たちの国際理解だけでなく、外国の人々にも「帯広市民と交流を広げるきっかけになる」と好評だ。

身近に触れ合う外国文化

外国人と市民の草の根交流を図ろうと同市が2000年度から始めた外国文化講座も「読み語り」と対をなすイベントだ。外国人講師派遣事業と銘打ち、04年度には16カ国44人の外国人が29講座を受け持った。

講座は、イタリア、インド、モンゴルなどの料理教室、英語、中国語、韓国語、タガログ語、インドネシア語などの語学教室、趣味ではアメリカ、カナダ、韓国、フィリピンなどの遊び、中国の切り絵、フィリピン伝統刺繍、韓国絵画、スリランカ、インドの民族衣装サリーの着方—など多彩で楽しい内容だ。

5人以上のグループで申し込みばOKで、しかも、会場費、材料費はグループ持ちだが、講師への謝礼は市が負担し、講座内容は参加者と講師が話し合いで決めるという、自主性を重んじた仕組みになっている。

数字はやや古いが03年度の講座参加者は一般サークル13件、PTA関係11件、町内会5件、個人申し込み6件、子育てサークル4件、高校サークル2件など41グループ1千160人になっている。

担当の国際交流員のスパワディ・ポリストワニトチョンさん（タイ出身）は「自分の国のことを知ってもらえるし、講座が終わっても日本人との付き合いが続いている例も多い。人々の心の通った草の根交流として大きな意味があると思う」と語っている。



米マディソンのチーズパイ作りの講習
=2004年3月



さまざまな国の人と語り合うフリートークのひとコマ
=2004年8月

多くの出会いを生む国際交流広場

「読み語り」、「外国文化講座」と並ぶ国際交流のもう1つの柱が、同市の国際交流施設「森の交流館・十勝」内での国際交流広場「アイビー・ラウンジ」活動だ。

アイビーは英語でツタ類。同広場内で繁茂するツタ類にちなみのもので、ツタのように人と人のつながり、友情を広げていこう—との意味も込められている。

グループに分けて英語によるジェスチャーゲームや伝言ゲーム、ブラジルの料理作りとポルトガル語の勉強などを外国人と帯広市民が一緒になって楽しみ、学び合おうというイベントだ。

これについて同市では①少人数のため対話が図りやすく、身近な交流が出来る②毎回さまざまな民族の人と話し合うことで、言葉や文化の壁を取り省くことが出来る③講座を通して、交流の輪が広がる④市民と在住外国人間で国際相互理解が図れる—とその利点を強調する。

確かに、こういった3本柱を中心にした国際交流・理解活動を自治体自らがきめ細かく、しかも組織的に実施している点では、「帯広方式」といっていいほどの内容を備えているといえる。

中核となっている「森の交流館・十勝」

これらの多岐にわたる活動が有機的に行われている大きな理由として、国際協力機構（JICA）帯広と帯広市の「森の交流館・十勝」の存在が挙げられる。釧路市の国際ウエットランドセンター（KIWC）同様、帯広市の国際交流の活動、施設の中核的役割を果たしている。

JICAの地方への事業委託に伴って、道内では1996年（平成8年）、札幌市と帯広市の2カ所に国際センターが設置された。それぞれ社団法人北方圏センターが札幌国際センター、



森の交流館を活用した「世界のともだち」の楽しいイベント
=2004年

帯広国際センターとして管理運営、研修業務を受託している。

アジア・太平洋、中南米、中近東・アフリカなどの各地域の人々が毎年、道内で様々な研修を受けており、その人数は2004年度の場合、札幌、帯広合わせて811人、うち324人が帯広の担当だった。

1996年帯広の森にJICAの帯広国際センターがオープンすると同時に、隣接して建築されたのが「森の交流館・十勝」だ。

同交流館独自の活動だけでなく、色々な国の人々が同センターに宿泊、研修するのに合わせて、自然な形で住民との交流を行う場としても同交流館の人気は高く、利用者は年間3万人を超える。

同市には国際交流員が4人も常駐しており、100人以上の在住外国人や日本人ボランティアが企画・運営する「世界のともだち」のイベントや、森のハロウィーンパーティーなど工夫を凝らした催しが行われ、文字通りJICAの活動とも連携した“国際交流・理解・協力の場”として大きな役割を果たしている。



民族舞踊は各国の文化を理解する上でも格好の国際交流だ
=2004年7月

米、中の2市と姉妹・友好都市提携

【スワード市（米アラスカ州）】

スワード市との姉妹都市提携は40年近く前の68年（昭和43年）にさかのぼる。当時帯広農業高校教諭だった大園嘉之氏の実弟の雅彦氏がアラスカ滞在中の67年、スワード市長から帯広市との文化交流を希望する手紙を受け取った。この一通の手紙が縁となり、1年後には一気に姉妹都市提携の調印となった。

釧路市が82年に北洋漁業の補給基地のスワード港と姉妹港提携を結ぶ14年も前のことだ。

以来、高校生や親善使節団の相互派遣、児童子供たちの絵画の交換などの息の長い交流が続けられ、高校生の相互派遣だけでも両市からそれぞれ約100人、計200人を超えている。

また、スワード市で毎夏開かれている「マウント・マラソン・レース」には帯広市長杯が、また9日間にわたる釣り大会「シルバー・サーモン・ダービー」には「帯広市国際親善交流市民の会」会長杯が贈られ、交流は市民の間に着実に広がっている。

2003年（平成15年）7月、姉妹提携の橋渡しをした大園雅彦氏＝千葉県在住＝が、スワード開拓100周年、姉妹都市提携35周年を記念したスワード親善訪問団に特別参加し、両市にそれぞれ100万円を寄付した。

これを元に帯広市では「スワード市友好親善推進基金（通称、大園基金）」、スワード市では「市民交換プログラム」を設け、2004年度から市民各2人の相互訪問に活用している。

「市民レベルの交流の輪をさらに広げてほしい」という大園氏の願いが改めて実を結んだわけで、市民ぐるみの交流はさらに勢いがつきそうな気配だ。

【朝陽市（中国・遼寧省）】

両市の交流は1985年（昭和60年）5月朝陽市から経済貿易視察団が帯広市を訪れ、同年9月に今度は帯広市から中国東北地区親善訪問視察団が朝陽市を訪問したことから始まる。

87年以降毎年、農業研修員の受け入れ、専門家の派遣などが行われ、農業技術交流は定着した形になった。91年（平成3年）からは帯広市立若葉小と朝陽市立青紅小の間で児童の絵画などの作品交換も始まり、交流は次第に「農業」を越えた広がりをみせてきた。

この流れと15年間に及ぶ交流の実績に押されるように2000年（同12年）11月、朝陽市長を団長とする公式訪問団が帯広市を訪れ、友好都市提携の運びとなった。

02年から高校生の相互派遣を実施、また、同年の帯広市開基120年・市制施行70年記念式典には朝陽市歌舞伎団が親善公演をするなど、交流は活発化している。

さらに、友好都市提携5周年を記念して05年（同17年）7月、帯広市長を団長とした親善訪問団が朝陽市を訪れたが、

メインテーマは「経済交流のきっかけづくり」。朝陽市側は「日本企業だけの工業団地を造ってもいい」と極めて積極的に、具体化にはまだ課題は多いものの、将来に向けて経済交流の可能性も出てきている。

さまざまな自発的な動き

同市のこういった活動には民間の人々の自発性が下支えとなり、しかも相互のサポート体制がしっかりしているのが特徴になっている。

1975年（昭和50年）にスタートした「帯広市国際親善交流市民の会」は、地元の有力者も加入している会員約150人の市民団体で、スワード市との交換留学生の派遣・受け入れ、児童生徒の絵画交流、ワイン・パーティーによる「国際親善市民の夕べ」の開催、JICA研修員ら外国人に正月の遊びなどを学んでもらう「日本のお正月」の催し、朝陽市からの親善訪問団の受け入れ—など、市民レベルでの多彩な国際親善活動に取り組んでいる。

また、モンゴルとの友好団体である特定非営利活動法人（NPO法人）「モンゴルパートナーシップ研究所」（略称MoPI、本部・大阪市）の北海道支部も2005年（平成17年）春に帯広市内で設立され、同支部の最初の事業として同年6月「もうひとつのミルクの国・MoPIモンゴル 写真と子供の絵展」が開かれた。

こういった国際協力団体は十勝地方には30以上あるが、そのネットワークを作り、団体相互の連携強化や情報交換を図っているのが、「森の交流館・十勝」に事務局を置いている「十勝インターナショナル協会」だ。

外国人への生活相談や英語の十勝情報ガイド、マップを作成するなど、外国人が暮らしやすい情報の提供などさまざまな分野から市民レベルの国際交流・協力事業に幅広い活動を行っている。

このほか、帯広畜産大学の存在も帯広の国際化の大きな特徴だろう。

同大は8カ国11大学と国際交流協定を結んでおり、教員、学生の相互交流、共同研究、学術交流、さらにはJICAの研修員受け入れ、JICAとの協働体制による国際貢献の人材育成—など、一般ではなかなか出来ないような国際交流・協力が可能となっている。

例えば、1999年（同11年）に発足した「十勝ブランド検討委員会」（委員長・三上正幸帯広畜産大学名誉教授）は十勝のチーズの「地域ブランド」確立に取り組んでいるが、この流れの中で2005年（同17年）6月、帯広市で「コミテ・プレニエ・フロマージュ（ナチュラルチーズ国際交流会議）」の開催が実現した。

1991年（同3年）の第1回会議以来コミテが欧州以外の国で開かれたのは帯広が初めて、という快挙。2001年11月の「ナチュラルチーズサミットin十勝」にコミテの提唱者で、フランス農務省酪農担当官のジェラルド・リポー氏を招いたのが縁になったものだが、3日間の会議にフランス、イタリアなど欧州7カ国59人を含む約160人が参加した。

味覚、製造、衛生、販売・流通などの専門的な分科会討議や国産ナチュラルチーズのコンクールなども行われ、閉会の際、リポー氏は「十勝の生産者を勇気付けるためにコミテを開いた。頑張ってもらいたい」と国際的なエールを送った。

この試みが恒常的なものになるかどうかは、これからの課題だが、「十勝ブランド」が地域を越えて国際化への第一歩を踏み出したことは間違いない。

「森の交流館・十勝」建設時に帯広市長だった高橋幹夫・社団法人北方圏センター帯広国際センター館長は「もともと、十勝地方は大豆の国際相場など穀物生産に関連して国際感覚が生活の中に根付いており、歴史的にも新しいものや外国人への抵抗感が少ない。小回りの効く地方都市の良さに加え、帯広畜産大学、JICAの存在が国際化推進の願ってもない役割を果たしてくれている。帯広への経済効果という意味でも国際化はますます重要になっていくだろう」と指摘する。

帯広には他地域がうらやむほどの国際交流・協力の条件と環境、それを育てる気風、土壌があるといえるようだ。

帯広市

人口：約17万2千人 面積：618.9km²

<http://www.city.obihiro.hokkaido.jp/>

十勝平野の中心部に位置し、十勝地方の政治、経済、産業、文化の中心で我が国を代表する畑作、酪農地帯。ハム、ソーセージ、チーズなどの畜産・酪農製品、菓子、帯広ニットなどが特産品だが、最近では

帯広発の豚丼も話題になっている。

国際交流の問い合わせ先

帯広市企画部国際交流課

同「森の交流館・十勝」

TEL(0155)24-4111

TEL(0155)34-0122